

諏訪前遺跡報告書

国道140号線(窪平バイパス)

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本報告書は国道140号窪平バイパス建設に先立ち平成8年度に発掘調査された東山梨郡牧丘町源助前遺跡についてその成果をまとめたものであります。

本遺跡は笛吹川支流の琴川左岸の高台に立地しており、当初は縄文時代の集落が予想されておりましたが、調査の結果、再葬墓と考えられる弥生時代前期の単独埋葬や同時期の土器片などが確認されました。特にこの時期の再葬墓は県内では二例目となる貴重なものであります。また、弥生時代前期という時期の居住の痕跡が、笛吹川上流の高標高域で確認されたことになりますが、このことはこれまで確認してきた県内での傾向をさらに追加することになり、盆地底部での水田開発以前の生活の様子を知るうえで貴重な資料と言えるものです。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例 言

1. 本報告書は国道140号線（窪平バイパス）建設に先立ち調査された東山梨郡牧丘町源助前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は建設省の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌・宮里学が担当した。
4. 本報告書の作成は長沢・宮里が行い第Ⅲ章及び第Ⅴ章を長沢が、第Ⅰ章及び第Ⅱ章を宮里が執筆した。なお、埋葬内土壤分析及び土坑内炭化物によるC14年代測定は（株）パリノサーヴェイに依頼した。
5. 写真撮影は長沢・宮里が行った。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたり牧丘町教育委員会大崎文裕氏に種々ご協力いただいた。記して謝意を表する次第である。

目 次

- 第Ⅰ章 調査に至る経過
- 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境
- 第Ⅲ章 遺構と遺物
- 第Ⅳ章 自然科学分析
- 第Ⅴ章 まとめ

調査組織

調査主体	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当	調査研究第2課 主査文化財 主事 長沢 宏昌 同 文化 財主事 宮里 学
作業員	寺内みち子・雨宮千尋・野沢 茂美・竹内孝治郎・赤岡敦・ 林周子・山崎靖子・戸田ひ ろ・黒瀬信子・山下好・名取 婦美子・小河いつみ・古屋茂 美・長塚一美・楠間美季江・ 堀内まき・渡辺麗子・中込み ち子・佐々木富士子
調査協力	牧丘町教育委員会

第Ⅰ章 調査に至る経緯

国道140号線（通称産平バイパス）建設に先立ち、予定路線上における埋蔵文化財の存在有無を確認したところ、今回調査地となった牧丘町室伏字西畠地内で、調査前遺跡の存在が確認された。設計上は、該当地はトンネルであるため、埋蔵文化財に直接影響がないとされたが、開削工法であるため発掘調査に至った。

調査については、試掘調査を実施し、埋蔵文化財の範囲を確定したうえで発掘調査に移行した。

発掘調査方法は、調査範囲確定後重機による表土剥ぎを行なった。調査区には国土座標による5m間隔のグリッドを設定し、遺構・遺物記録の基準とした。

調査にかかった期間は、試掘調査から発掘調査の終了までが平成8年（1996）5月13日から同7月8日、整理が同12月10日から平成9年（1997）3月21日までである。なお、法定手続きは以下のとおりである。

平成8年5月6日 文化庁長官宛の発掘通知提出

平成8年7月24日 日下部警察署長あてに埋蔵文化財発見届けの通知提出

平成10年3月30日 発掘調査報告書刊行

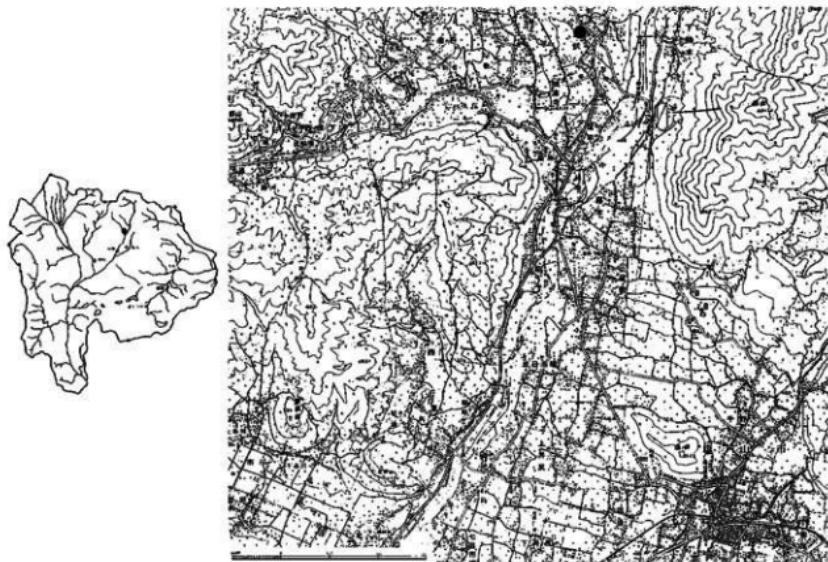
第Ⅱ章 地理的歴史的環境

地理的環境

調査を実施した地点は、東山梨郡牧丘町室伏字西端588他に位置する。

牧丘町は甲府盆地の北東部（北緯32度44分58秒、東経138度45分04秒）に位置し、東に塩山市、西に甲府市、北に三富村、長野県川上村が隣接している。町域の北部は国師岳や北千丈岳と2,600m級の山岳を背負い、南部の標高の低い市外地域との標高差は約2,100mあり、町域の85%は山林が占める山間地域である。

調査地点は、牧丘町役場から北北西1.2kmの地点で、国道140号線から西へ200m程入ったところである。北部山岳地帯に水源を持ち、町域を蛇行しながら南下し笛吹川に合流する琴川の左岸にあたる。



第1図 遺跡位置図

この地域は砂礫質沖積層であり、琴川により開析され谷状地形になっているが、本来の地形は北西から東南に長い台地（倉科台地）であったと考えられる。したがって、調査地点は琴川の崖状真上に立地することとなり、その比高差は約12mを測る。

また、調査地は、現在も山地斜面と河川の間で、大きな面積ではなく、起伏も持つが、比較的平坦な台地上の土地を利用して生活基盤を作り、恐らく当時に至っても、ある程度の人口の集団が生活するには決して不自由な土地ではなかったと推測できる。

現在調査地点周辺の環境は、特産である葡萄をはじめ、桃などの果樹栽培に多くの土地が利用されている。

歴史的環境

牧丘町及び調査地点周辺特に埋蔵文化財の概要について記載しておく。「牧丘町誌」「埋蔵文化財分布調査報告書」によると、旧石器時代から近世の埋蔵文化財包蔵地ないしは散布地として確認されているのはおよそ80件前後とされている。

時代別に分類してみると、縄文時代に属する時期が最も多く、約70件（内複合遺跡46件）を数える。次いで、奈良・平安時代、中・近世、弥生時代、古墳時代、旧石器時代の順で存在が確認されている。

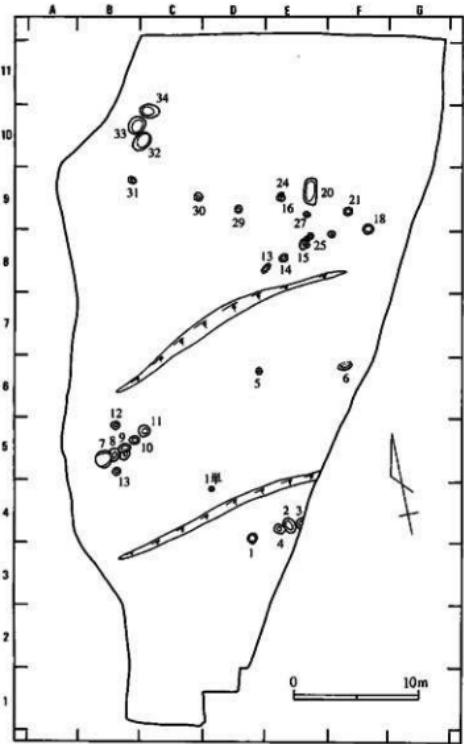
この中には、鎌倉から室町時代に築城された小田野城跡や琵琶城跡をはじめ、甲斐武田家滅亡後に徳川家康により大改修された中牧城（淨古寺城・城古寺城）も含まれる。この地区に中・近世の埋蔵文化財包蔵地が目立つのは、恐らく秩父往還の存在と安田義定の拠点という時代背景が大きく関与しているからであろう。

地域別に分類してみると、埋蔵文化財包蔵地が多く見えるのは西保中地区、倉科（倉科山寺・鈴の宮等）地区に大きく分けることができるが、両地区には時代的属性の変化はあまりないよう見える。恐らく西保中地区は浅川を中心として、倉科（倉科山寺等）地区は琴川をはじめいくつかの河川を中心に、土地利用の選択がなされた結果と捉えることができる。

ただし、実際に発掘調査が実施された事例はあまり多くはない。時代的に見てみると、旧石器時代の調査事例はない。縄文時代については、井戸川遺跡・鈴の宮遺跡・奥豊原遺跡・須川東遺跡・高野遺跡・破魔射場遺跡等で早期の押型文や山形文の土器片や石器が確認され、現在でも県内の貴重な資料となっている。

主な調査事例としては、昭和48年には県教育委員会により古宿道上遺跡（町立西保育園建設事業による）が調査され、縄文時代中・後期の敷石住居跡やこれに伴う土器・石器類が多く出土している。

平成3年には倉科地区丸山で山梨学院大学が発掘調査を実施し、縄文時代早期の住居跡2軒をはじめ、中期の土坑などの遺構・遺物と平安



第2図 遺跡全体図

時代の土器片が出土し、町内には縄文時代早期の埋蔵文化財が多く包蔵されていることが立証された。

平成3年（県教育委員会）、平成4年（牧丘町遺跡調査団）には倉科地区の膳棚で曲田遺跡の発掘調査が実施され、古墳時代の住居跡13軒、平安時代の住居跡10軒をはじめ縄文時代前期の遺構・遺物が検出されている。

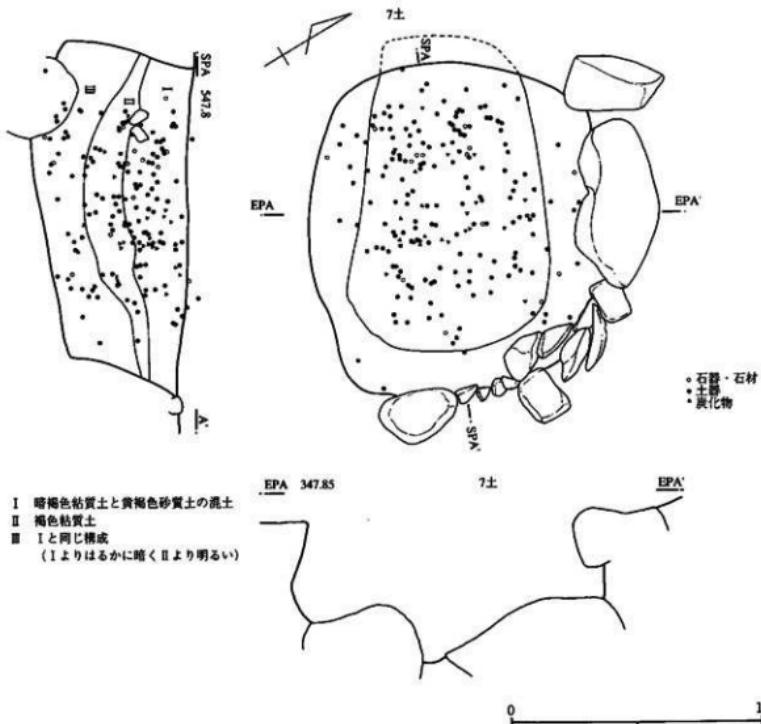
なお、今回の調査は、町内対象地区における最初の埋蔵文化財調査に位置付けることができ、地域のみにとどまらず、貴重な情報を提供するものであろう。

第Ⅲ章 遺構と遺物

今回の調査は、琴川左岸のバイパス予定地のうち、遺物の散布状況や地形から試掘地点を設定して遺物・遺構の有無を確認することから開始した。その結果、琴川沿いの南々東緩斜面約1,500m²が本調査の対象となり、その全面を調査した。

試掘段階では、縄文時代の土器片が多く確認されたため、該期集落の存在が予想されたが、調査の結果、住居跡は存在せず、土坑および単独埋甕が確認された。また、遺物は縄文土器だけでなく、当初予想しなかった弥生土器や平安時代末期の土器類などが出土した。調査は琴川側から北に向かい5mごとに1～13まで、また西から東へA～Gまでの番号を付し、5m×5mのグリッドを設定し全面調査を行った。

以下に、遺構・遺物について記す。なお、文中の（）内番号は遺物の通し番号であるため、本来記すべき図面番号は省略する。



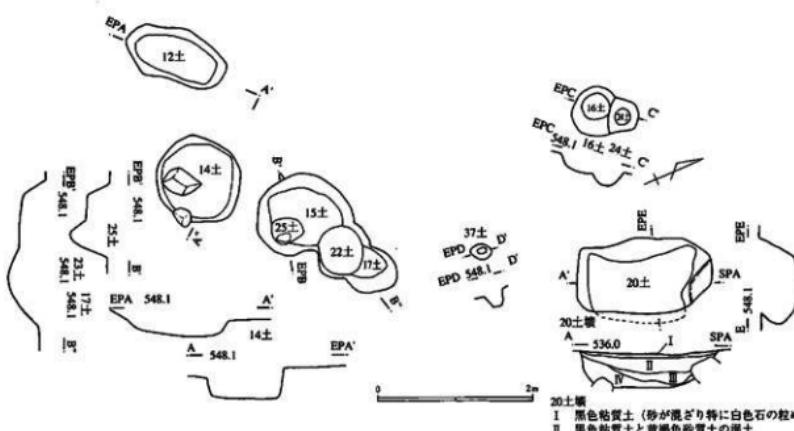
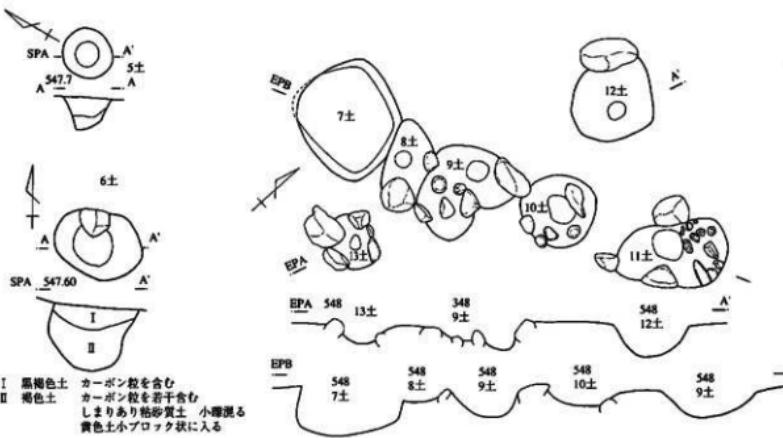
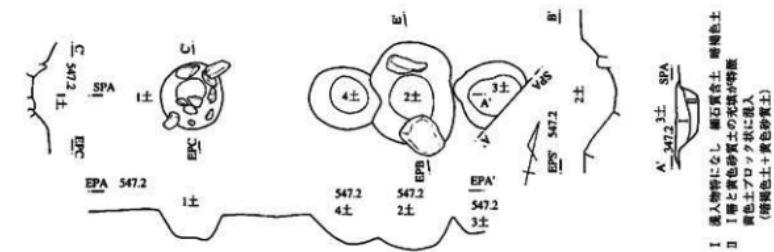
第3図 土坑1（7土）

土坑と出土遺物

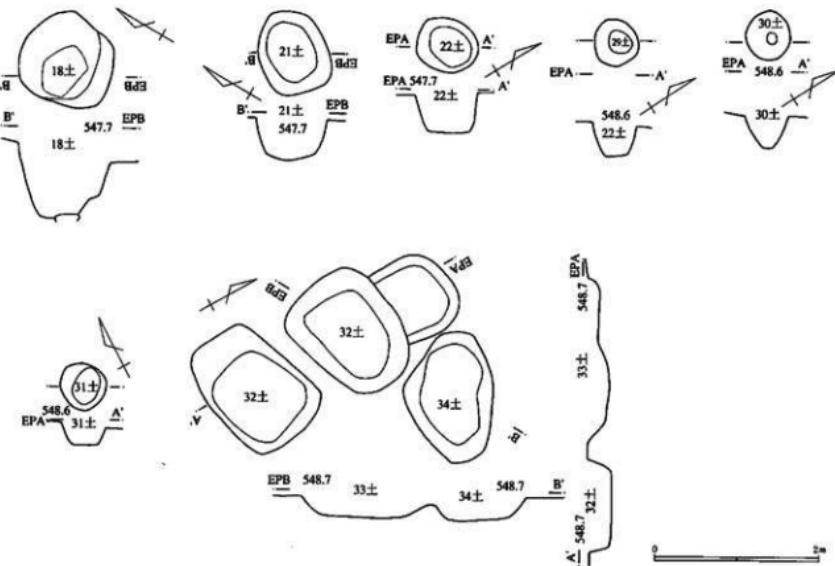
- ・1号土坑 D-4グリッド。不整円形を呈し、長径0.8m、短径0.7m、確認面からの深さ0.3mを計る。砂礫層中に掘り込まれており、底面、壁面に礫が顔を出している。本土坑からは土器片が1点（1）出土している。内外面とも摩滅しているが、外面に条痕が確認される。弥生時代中期初頭に位置づけられよう。
- ・2号土坑 E-4グリッド。長辺円形を呈する。長径1.5m、短径1.1m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・3号土坑 E-4グリッド。不整円形を呈する。長径0.9m、短径0.8m、深さ0.2mを計る。遺物は中世の坏破片（153）が出土している。底面には糸切り痕がみられる。胎土に赤色粒子を含む。
- ・4号土坑 E-4グリッド。楕円形を呈する。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・5号土坑 D-6グリッド。円形を呈する。直径0.7m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・6号土坑 F-6グリッド。楕円形を呈する。長径1.2m、短径0.9m、深さ0.8mを計る。遺物は出土していない。
- ・7号土坑 B-6グリッド。不整円形を呈する。長径1.4m、短径1.3m、深さ0.6mを計る。片側の壁のみ袋状を呈する。本土坑も砂礫層中への掘り込みであるため、坑口や坑底に巨大な礫が顔を出している。本土坑からは土器片や黒曜石、あるいは炭化物など多くの遺物が出土した。第1図に示したように、遺物は土坑中央部の中層部へ上層部にかけて多く出土する状況が確認され、土器片、黒曜石片、炭化物があった。黒曜石片では定形の石器はもちろん加工痕のある剥片も認められなかった。炭化物はドングリ類とクルミが確認された。なお、下層より出土した炭化材で¹⁴C年代測定を行った（第IV章参照）。

土器は43点を図示する。2～12は縄文土器である。このうち2は薄手で、胎土に長石が目立つ。6～8は縄文帯と無文帯に分かれるが、磨り消しではない。また、内面の成形はやや雑であり、胎土に長石が目立つ。胎土から縄文土器としておくが、弥生時代中期の資料にも同様な文様のものも存在することや、後述するように本土坑資料の主体が弥生時代中期であることから、その時期の可能性も否定できない。9はカーブに歪みがみられ、器形不明である。あるいは上下逆であるかもしれない。これも胎土に長石が目立ち、内面には指頭痕が確認される。11の胎土にも長石が目立つ。これらは諸磯aもしくはb式であろうが、10が諸磯b式であり、また、遺構外出土資料中にも諸磯b式が多く見られることから、b式期の位置づけとしておきたい。12は土製円盤で、中期中葉に位置づけられる。13は縄文時代晚期の水式土器の系譜が考えられる資料で、弥生時代前期末頃の位置づけが妥当であろう。14はやはり胎土に長石が目立ち、縄文時代前期末の土器の可能性があるが、口縁部に縄文帯を持つ甕が存在することから弥生時代中期としておく。15～43はすべて弥生時代中期に位置づけられる条痕文土器である。これらにも胎土に長石が目立つものも含まれる。このうち15～20は土器片の周囲を磨いた円盤である。また32も一部を磨いており、円盤を意識した可能性がある。21は8点が接合したもので甕の口縁部である。口縁部下に指頭もしくは同様の工具により押し引きによる圧痕を連續施したもので、以下の部分は条痕が施される。内面はナデ調整が行われる。22も甕の口縁部片であるが、口縁直下に断面三角形状の幅広隆帯を貼付し、刻みを施している。以下は縱方向の条痕を施し、内面には横方向の条痕が見られる。

- ・8号土坑 B-6グリッド。不整円形を呈する。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.2mを計る。8号～13号土坑は砂礫層中への掘り込みであるため、壁や底面に礫が多く見られた。遺物は出土していない。
- ・9号土坑 B-6グリッド。不整円形を呈する。長径1.4m、短径0.8m、深さ0.3mを計る。遺物は土器片2点が出土した。44は弥生時代中期の条痕文土器である。45は薄手の口縁部片で狭い隆帯上に細かい刻みを有する。口唇直下に条線が見られる。縄文後期であろうか。
- ・10号土坑 B-6グリッド。円形を呈する。直径0.9m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。
- ・11号土坑 C-6グリッド。楕円形を呈する。長径1.5m、短径0.8m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。

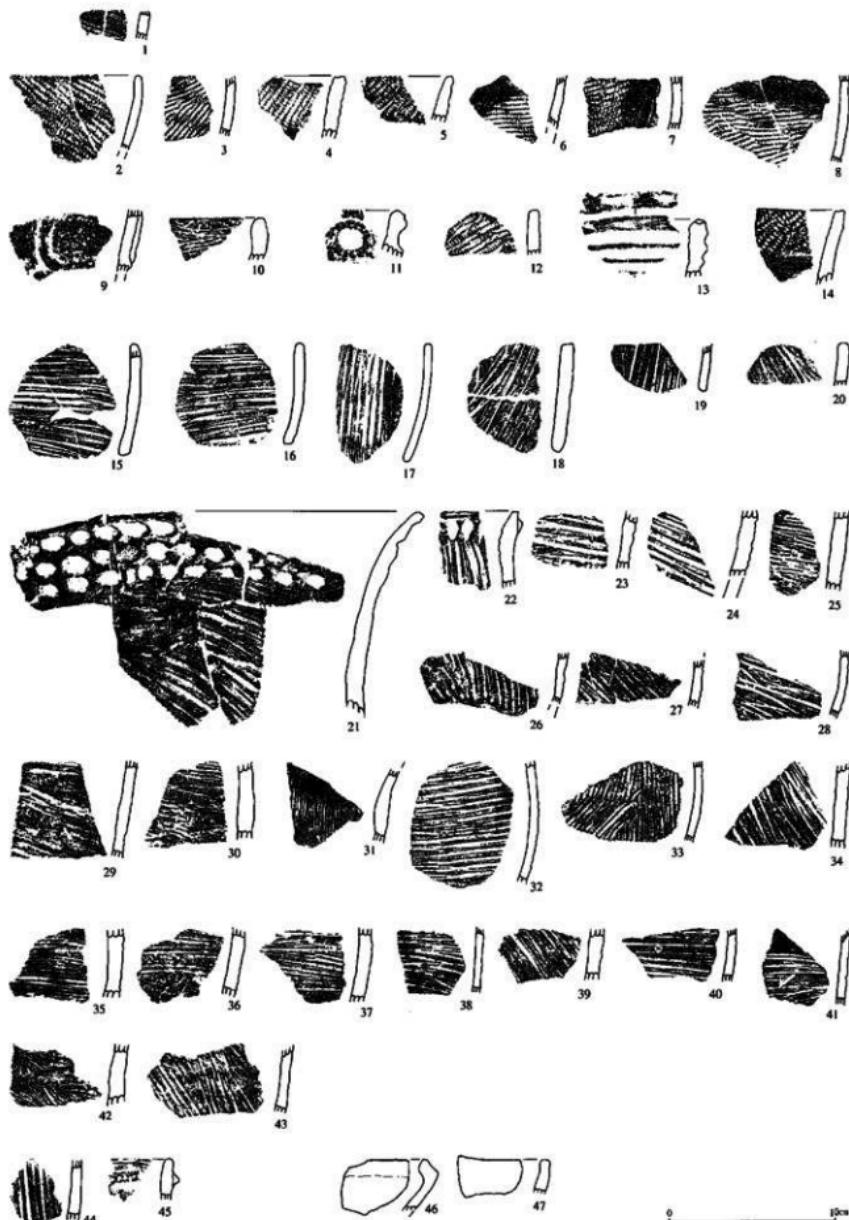


第4図 土坑2



第5図 土坑3

- ・12号土坑 B-6グリッド。不整円形を呈する。長径1.1m、短径1.0m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・13号土坑 B-6グリッド。不整円形を呈する。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。
- ・14号土坑 E-8グリッド。円形を呈する。直径1.0m、深さ0.4mを計る。本土坑は掘り込みがしっかりしており、壁の立ち上がりは真っすぐである。遺物は出土していない。
- ・15号土坑 E-8グリッド。不整円形を呈する。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。
- ・16号土坑 E-9グリッド。円形を呈する。直径0.6m、深さ0.1mを計る。遺物は出土していない。
- ・17号土坑 E-8グリッド。椭円形を呈する。長径0.7m、短径0.6m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。
- ・18号土坑 F-8・9グリッド。不整円形を呈する。長径1.1m、短径1.1m、深さ0.9mを計る。遺物は出土していない。
- ・19号土坑 D・E-8グリッド。不整円形を呈する。長径1.3m、短径0.6m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。
- ・20号土坑 E-9グリッド。不整円形を呈する。長径1.7m、短径1.0m、深さ0.5mを計る。壁は袋状を呈する。遺物は出土していない。
- ・21号土坑 F-9グリッド。椭円形を呈する。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.5mを計る。遺物は出土していない。
- ・22号土坑 F-8グリッド。椭円形を呈する。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・23号土坑 E-8グリッド。円形を呈する。直径0.7m、深さ0.5mを計る。遺物は出土していない。



第6図 土坑出土土器

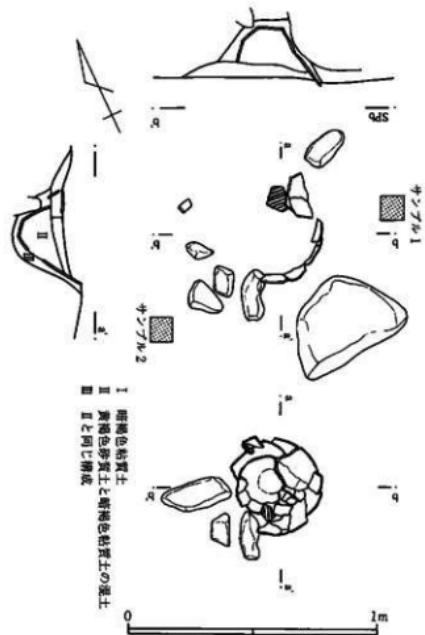
- ・24号土坑 E-9グリッド。不整円形を呈する。長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。
- ・25号土坑 E-8グリッド。不整円形を呈する。本土坑は15号土坑内に掘り込まれているため大きさははっきりしないが、確認部分での長径0.4m、短径0.3m、深さ0.6mを計る。遺物は出土していない。
- ・27号土坑 E-9グリッド。椭円形を呈する。長径0.3m、短径0.2m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。
- ・29号土坑 D-9グリッド。円形を呈する。直径0.5m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・30号土坑 C-9グリッド。円形を呈する。直径0.5m、深さ0.4mを計る。遺物は出土していない。
- ・31号土坑 B-9グリッド。円形を呈する。直径0.5m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。
- ・32号土坑 B-C-10グリッド。不整円形を呈する。長径1.5m、短径1.1m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。
- ・33号土坑 B-10グリッド。不整円形を呈する。長径1.5m、短径1.1m、深さ0.2mを計る。遺物は土器片2点のみである。46・47とともに無文であるが、胎土に長石や雲母が目立ち焼成も良好である。いずれも縄文前期末に位置づけられよう。
- ・34号土坑 C-10グリッド。不整円形を呈する。長径1.6m、短径1.1m、深さ0.3mを計る。遺物は出土していない。

単独埋甕

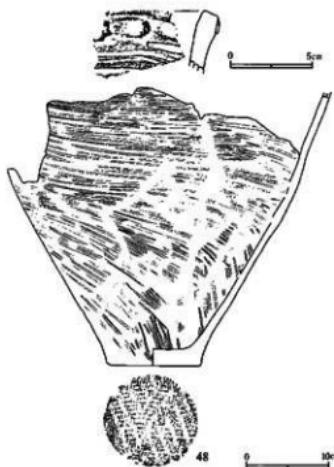
D-4グリッド。本埋甕は広口壺の胴下半部を正位に埋設したものである。得られた土器片のうち、10cm以

上の大破片数片が接合しなかった。遺構が確認された場所が、段差のある畑の境の石垣に近い部分であったため石垣の構築によって失われたか、あるいは耕作の影響を受けたか、いずれにせよ遺構構築時には土器はもっと大きかったものと考えられる。

掘り方は直径0.6m、確認面からの深さ0.3mを計



第7図 単独埋甕



第8図 土器(その2)

る。土器の大きさからして掘り方はギリギリの大きさである。また、砂礫層中への掘り込みであるため、壁面や底面には礫が顔を出している。とくに圓右上の礫は大きく、 $b - b'$ セクションに見られるように掘り方の部分まで伸びていた。この礫によって掘り方が制限されていたと考えられる。

さて、土器(48)は埋壺内面に口縁部小破片が1点だけであるが確認されており、この壺の口縁部として差し支えないものと思われる。口縁部直下に指頭もしくは類似した工具により、摘むような方法で押し引きを行っている。以下は条痕文を施す。内面はナデ調整である。底部には雷文を表出した網代圧痕が鮮明に残されている。本資料は器高60cm以上と推定される大型の壺である。

なお、本資料の内部の土及び周囲2カ所の土を採取し、リン分析を実施した。詳細は第IV章に委ねるが、わずかながら内部の土にリン分が多く検出され、骨の埋納の可能性が指摘されている。

遺構外出土遺物

今回確認された遺物は土器・石器がコンテナ(内容30ℓ)に10箱ほどあるが、文様の明瞭なものを中心に提示する。

土 器

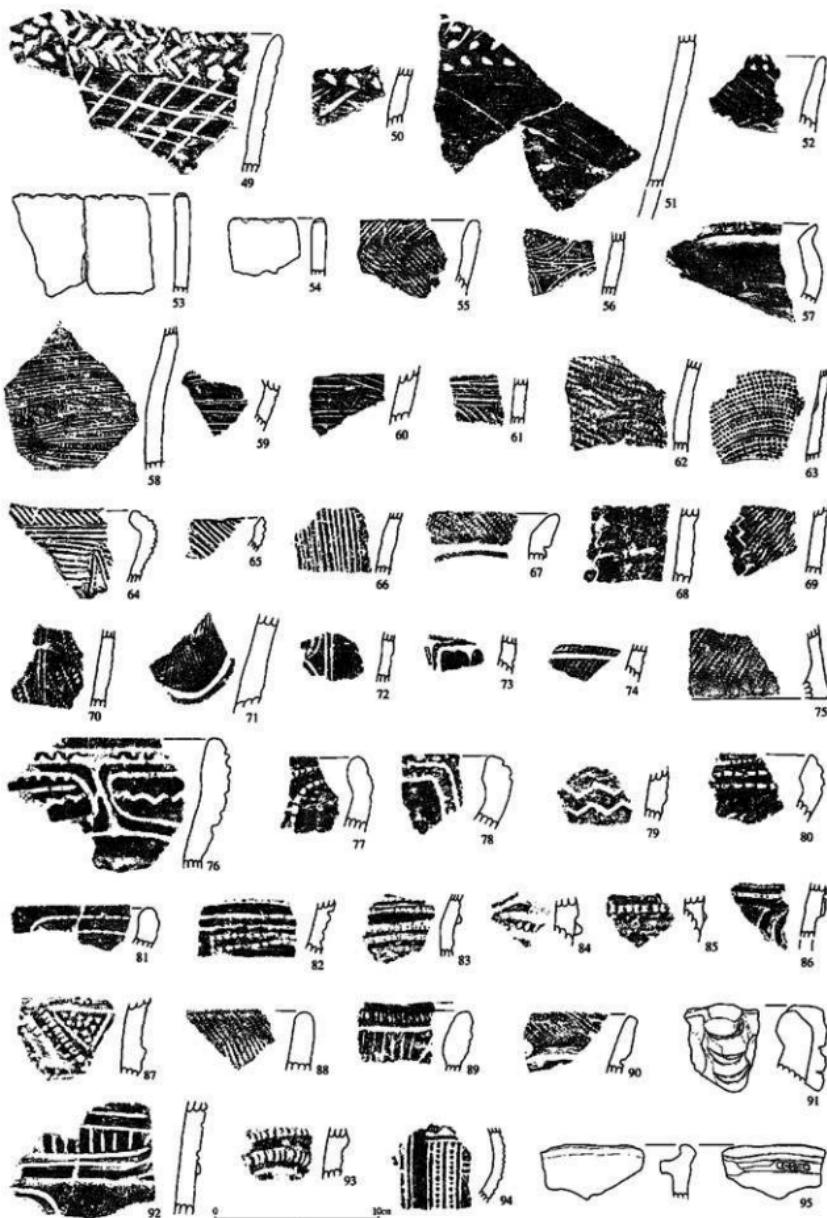
49・50は半截竹管による刺突と沈線の斜格子が施文される。胎土に纖維を含み砂粒を多く含んでいる。なお、49は波状口縁である。51も纖維や胎土は同じである。施文は半截竹管の刺突がみられるが、その文様帶の上部に斜行沈線わずかに確認される。なお、ここまでは同一個体の可能性もある。52も口縁直下に刺突がみられ、斜行沈線と波状文を施文している。口唇部は非常に薄く作られている。やはり纖維を含み胎土には砂粒が多い。53・54はやはり胎土に砂粒が多いが、纖維は全く含まない。口唇部に竹管状工具による刻みが施される。体部には、ごく浅い条痕がみられる。これらはすべて、貝殻沈線文系土器群のうち早期中葉末の田戸上層式期に位置付けられよう。55は羽状繩文が施されているが、結節ではない。纖維は含んでいないものの胎土に砂粒が多い。諸磯a式期に位置付けておきたいが、内面調整は雑である。56~62は諸磯b式で、いずれも胎土の長石が目立つ。57は胎土も精選され調整も丁寧な鉢である。63は唯一の諸磯c式土器で、胎土、調整とも良好である。64~75には中期初頭を一括した。このうち64は器面全面に半截竹管の押し引きを施し体部には三角区画の無文部を表出するもので、前期終末にまで溯るかもしれない。76~95は中期中葉を一括した。76~81は猪沢式、82~95は藤内式である。96~99は中期末~後期初頭に位置付けられる。100~103は後期前半の堀之内II式である。

105~152には弥生土器を一括した。105~109は、幅広の沈線を工字文風に配したものや深い押し引きを繰り返したもので、繩文時代晩期後半の水式土器の系譜上に位置付けられる土器群と考えられ、晩期終末~弥生前期初頭としておきたい。110~152には前期末~中期初頭の資料をまとめた。111・112は内外面に幅広の条痕が施されるもので、東海地方の水神平系である。それ以外の条痕文土器は内面には条痕が見られないが、やはり水神平系であろう。条痕の種類には工具の違いによると思われるいくつかのヴァリエーションが存在するが、これらは東海系条痕文土器の系譜として中部地方で独自の発達をしたとされるものである。なお、145~152は条痕が浅く細いものが主体で、櫛状工具の刺突(148)や簾状文化(151)などが見られ、144までの一群より時期的にやや新しく位置付けられるものであろう。

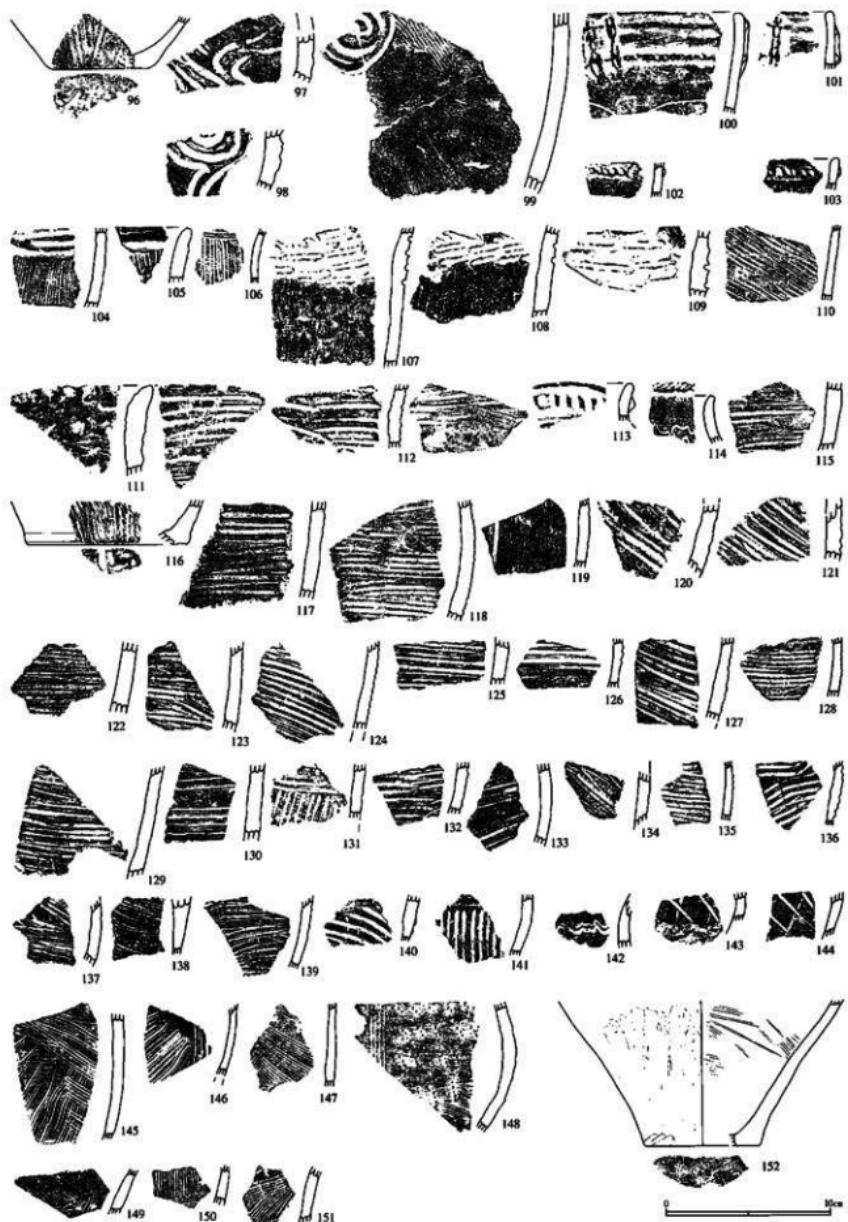
153以降には平安時代以降を一括した。154~158は中世のカワラケで底面には糸切りが見られる。いずれも胎土に赤色粒子を含んでおり、小破片である。159~165も削りや磨きがなく、中世への位置付けが妥当であろう。166・167は内面に崎文が認められ、167には外面にわずかながらヘラ削りも確認できる。平安時代に溯るもので甲斐型坏縄年X期(9世紀第4四半期)に位置付けられよう。168は小破片の鉄軸天目茶碗、169は黄瀬戸鉢でともに16世紀代に位置付けておく。170は型作りの布袋尊で近・現代であろう。

石 器

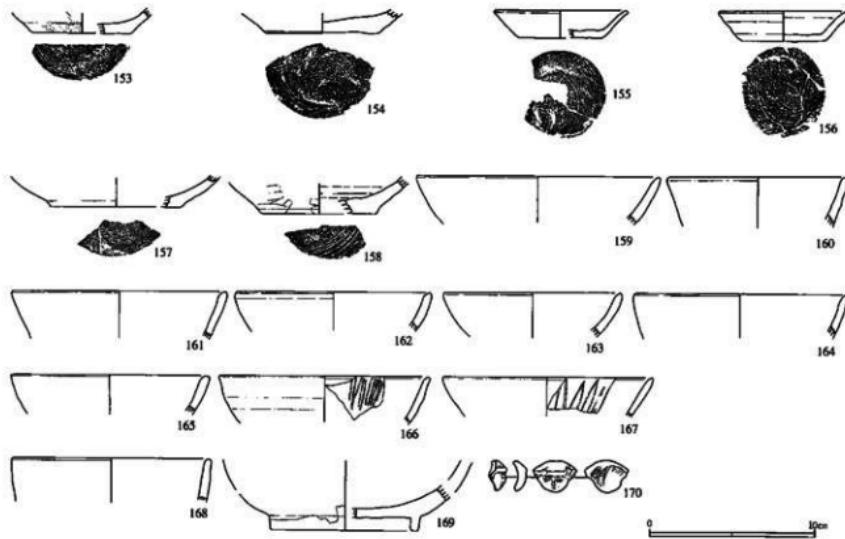
図示した石器は、出土した石器の中で加工の痕跡が観察されたもののみである。本調査で出土した石器の外



第9図 土器(その3)



第10図 土器(その4)



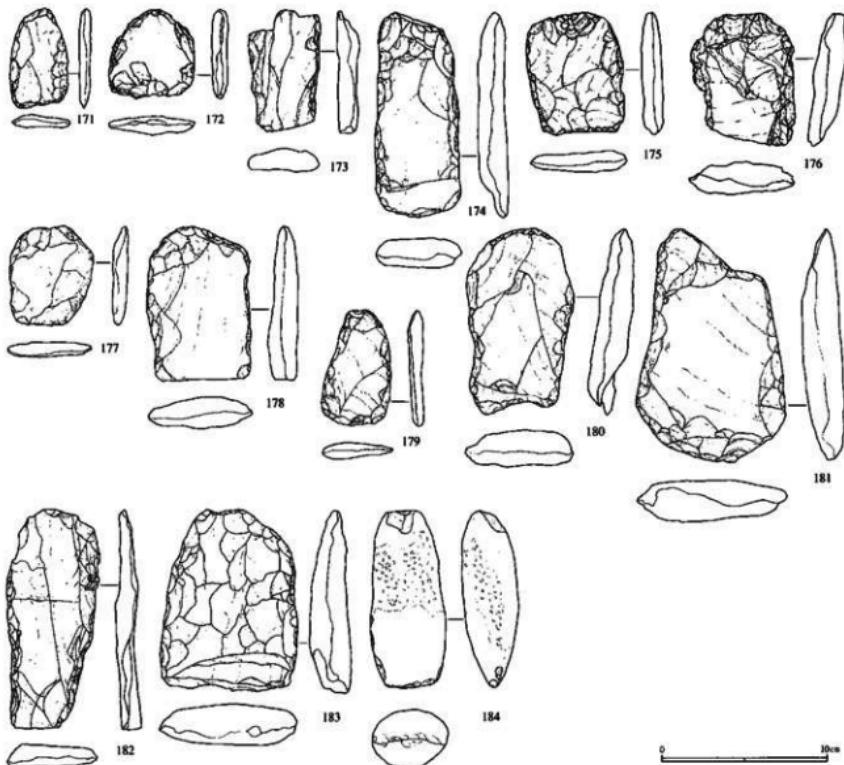
第11図 遺跡外出土器（その3）

観をみてみると、器種を問わず完形品は少なく破損品ないしは未製品及び2次加工剥片が多く出土している傾向がある。また、弥生時代の土器類が多く出土しているなかで、縄文時代的要素を強く持つ石器も多く出土している。

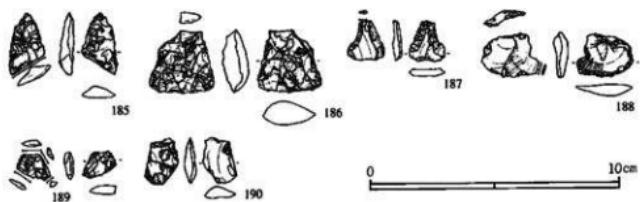
171～183は打製石斧に分類される石器群である。個々の詳細は記載しないが、大きさから3つに分類することができる。171・172・175・177・179は小型のグループに分類することができ、平面形態は撥形ないしは円形に近い状況を持つ。特に172・177などはスクレイパーに分類できるかもしれない。174・180・183は平均10cm前後の器長を持ち、平面形態は全て短冊形である。173・176・178は一端が欠損しているが、恐らくこのグループの範疇に入るであろう。181・183は器長、器幅ともに大型のグループに分類できる。183は折損しているが残状況から推測できる。平面形態は資料数が少ないので一概にいえないが181などは撥形に分類できよう。

184は磨製石斧である、基部と刃部に剥離痕が観察でき、特に刃部の剥離は微細である。背面の中位と側縁には打痕が観察できる。

185～190は全て黒曜石製である。185は下半部が折損しているが、両面に縁辺部からの加工が観察される。186は先端部が折損しているが両面の縁辺部に加工が施され、正三角形に近い形状を推定することができる。187は両面に主要剥離面を残しているが、両面の縁辺部からの加工を観察することができる。素材剥片の大きさや加工の状況から石錐の未製品と推測できる。188は横長剥片を素材とし、先端部に腹面からの加工を観察できる。スクレイパーに分類できる。189は先端部と左右の茎部が折損しているが、残存の形態から石錐と推測することができる。また、左側縁には鋸歯状の加工が見られる。190は縁辺の一部に対して主に背面からの加工を観察できるが形態的に器種を推定することは困難で、2次加工剥片と位置付けたい。



第12図 石器1



第13図 石器2

第IV章 自然科学分析

諏訪前遺跡の科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

諏訪前遺跡は、笛吹川支流の琴川左岸に位置し、河岸段丘上の南南東に傾斜する緩斜面上に立地する。この斜面からは、今回の発掘調査の結果、縄文時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。このうち、弥生時代前期の1号単独埋甕は、遺体埋納の可能性が指摘されている。そこで土壤理化学分析を実施し、遺体の痕跡の有無を調べ、遺体埋納の可能性について検討する。また、7号土坑では、弥生時代の土器片とともに炭化した種実遺体が検出されている。本土坑の年代に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定を実施する。以下に、各分析結果について報告する。

1. 1号単独埋甕の土壤化学分析

(1) 試 料

調査対象は、1号単独埋甕の1基である。この埋甕は口縁部が欠損しているものの、個体資料となりうる臺形土器である。遺構は、他の遺構から離れた場所に構築されている。

資料は、埋甕内（資料番号A）と埋甕内下部（資料番号B）、埋甕周辺（資料番号C・D）の4点が採取され、全点を分析資料とした。

(2) 分析方法

分析項目は、動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を選択した。また、リン酸の供給源には植物体もあるので、その影響を調べるために腐植含量も測定することとした。分析では、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、その工程を示す。

資料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mLに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

また、試料0.100～0.500gを100mL三角フラスコに正確に秤とり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mLを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル醸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定し、試料中の有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。この有機炭素量に係数1.724を乗じて腐植含量（乾土%）を算出する。

(3) 結 果

結果を表1に示す。

表1 1号単独埋甕試料の土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	P205 (mg/g)	CaO (mg/g)	腐植含量 (%)
試料A (埋甕内)	SL	10YR3/3暗褐	1.46	3.26	2.29
試料B (埋甕内の底部)	SL	10YR3/3暗褐	1.13	3.18	1.80
試料C (埋甕の周囲)	SL	10YR3/3暗褐	1.05	3.39	1.75
試料D (埋甕の周囲)	SL	10YR3/3暗褐	1.04	3.18	2.15

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SL：砂壤土（粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%）

リン酸含量は埋甕内でわずかに高い傾向にあり、カルシウム含量と腐植含量は埋甕内と周辺ではほぼ同等である。

(4) 考察

調査した埋甕内および土質は、砂壤土であった。理化学成分は土壤中の粘土分に吸着されることが多いため、粘土分の少ない埋甕内および周辺の土壤は理化学成分が保持されにくいうがえる。

ところで、リン酸の土壤中に普通含まれる量、つまり天然賦存量は約3.0P2O5mg/g程度とされ（Bowen, 1983； Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P2O5mg/gであったとする報告例もある（川崎ほか, 1991）。また、土壤中のカルシウム含量は普通1~50CaOmg/g（藤賀, 1979）といわれ、天然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きい。

埋甕内のリン酸含量は、天然賦存量と比較して少なかった、しかし、分析調査の結果では、埋甕内の周囲で腐植含量に大きな差がみられない中で、埋甕内でリン酸含量がわずかに高い傾向が認められた。土質が理化学成分を保持しにくい点を考慮すれば、埋甕内にはわずかながらもリン酸成分の濃集を指摘することができる。この点は、遺体成分などの残留を示唆する可能性があるが、現段階で当該期の調査例が少ないために検討の余地が残される。今後、当該期の埋甕について屋外や屋内の違い、他の遺構との位置関係を考慮した調査例を蓄積し、これを比較・検討して用途に関する情報を得たい。

2. 7号土坑の¹⁴C年代測定

(1) 試料

試料は、弥生時代の7号土坑より検出された炭化材3点である。

(2) 分析方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

(3) 結果

結果を表2に示す。

表2 放射性炭素年代測定年代結果

試料番号	試料の質	測定年代 (1950年からの年代)	Code. No.
No.C-11 試料①	炭化材	3270±110 1320B.C.	GaK-19654
No.C-18 試料③	炭化材	3950±180 2000B.C.	GaK-19655
No.C-22 試料④	炭化材	1420±230 A.D. 530	GaK-19656

(4) 考 察

7号土坑の時期は考古学的には弥生時代頃と考えられている。土坑覆土中の炭化材の¹⁴C年代測定値は、 3950 ± 180 y. B.P.、 3270 ± 110 y. B.P.、 1420 ± 230 y. B.P.と試料によって開きのある測定値となっていた。また、その年代値は既往の¹⁴C年代値と比較すると、①・③が縄文時代後期～晩期頃、試料④が古墳時代頃の年代値となっている。このような値となった原因は、本遺跡が斜面地に位置することから古い地層より洗い出された炭化物が土坑内に混入した、また、新しい時期の炭化物が生物擾乱の影響により土坑覆土中に取り込まれたなどの可能性が考えられる。これらのことについては、発掘調査で得られた本土坑に関する所見と併せて総合的に評価したいと考えている。

引用文献

- 天野洋二・太田 錠・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [H. J. M. Bowen (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, H.G.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学. 岩手進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター [H.G. BOLT and M. G. M. BRUGGENWERT (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法, 440p., 姫賢堂.
- 藤貢 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52 : 57-61. 地質調査所.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻.. 411p., 嶽業図書.
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 自然科学分析. 東京都板橋区五段田遺跡第二次発掘調査報告書, p.262-281.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 屋外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p. : p.39-40.

第V章 まとめ

今回の調査では、当初予想された縄文時代の集落は確認されず、縄文時代については遺物のみが出土したという結果であったが、その遺物に新知見が得られたこと、さらに全くの予想外であった弥生時代前期～中期の資料は大きな収穫であった。

縄文時代においては早期中葉の押型文土器は県内各地で発見されているものの、それに併行する貝殻沈線文系土器群は確認例が非常に少なく、とくに中葉末に位置付けられる田戸上層式は類例に乏しいものであった。田戸上層式土器を含む貝殻沈線文系土器群の出土状況を概観してみると、都留市中谷遺跡で貝殻腹縁文の施された、含繊維の土器小破片6点が確認されている。また、上野原町穴沢・カイル遺跡でも貝殻腹縁文土器が押型文土器とともに出土し、同町大門Ⅱ遺跡では田戸下層式期の住居跡が報告されている。さらに大月市岩殿中倉遺跡でも田戸上層式が出土しているとのことである。笛子姉以西では、大和村田平遺跡で繊維を含む貝殻沈線文土器が確認され、牧丘町奥豊原遺跡では押型文土器と三戸式の出土が報告された。八ヶ岳山麓に位置する明野村神取遺跡では無繊維の貝殻沈線文土器が出土し、これも三戸式併行と報告されている。檜形町曾根遺跡でも無繊維の小破片が確認されている。このように量的には少ないものの県内全域で散見されるが、地理的影響もあって県内では東部の郡内地域に濃いという傾向がはっきりしている。それと同時に、甲府盆地低部には今のところ全く確認されておらず、周辺の台地上や八ヶ岳山麓などで確認されていることも、その生業との係わりにおいて示唆的である。

弥生時代の遺構・遺物の確認も全くの予想外であっただけに驚きである。前期末～中期初頭に位置付けた単独埋甕は確実な弥生時代の遺構としては唯一といえるものであるが、該期の生活の一端を示すものであり、その確認は次の3点において大きな意義がある。まず第1点は、遺構が単独埋甕であったことである。同時期の単独埋甕は唯一明野村下大内遺跡で確認されている。長径120cm、深さ40cm程度の土坑に埋設された大型の甕に別個体の土器片を蓋に用いていたものらしく、大型の甕は器高78cm、口径28cm、最大幅52cmに復元された。本来完形であったものが土圧により潰れたものと推定されるが、口縁部は破片の数も少なく一部残存しているのみであった。また、土器の底部内面近くに若干の焼土が確認されたものの骨片は確認されなかつたとのことである。しかし、一般にこのような大型の甕を土坑内に立位で埋設するのは再葬墓であるケースがほとんどであることから、これも同様に理解されている。一方、本資料は土器は甕の胴部下半部と口縁部小破片で、現存高34cm、現存の最大径40cmを計る。推定復元値は器高60cm以上、径50cm程度となり、下大内遺跡例に比べやや小振りである。本例の場合上半部破片は全く残存していない。しかし、口縁部の小破片1点が確認されており、長石が目立つ胎土や色調などから同一個体の可能性が強い。下半部を打ち欠かれた状態で使用されたものか下大内遺跡例のように口縁部の一部を打ち欠かれた状態であったものが耕作等によって失われたものであるのかは不明であるが、口縁部の小破片が同一個体であるなら後者ということになろう。掘り方は大きな躊躇に制限されていたこともあって土器を埋設するギリギリの大きさであった。これは土坑内埋設という表現の可能な下大内遺跡例とは異なる。本遺跡例も内部に骨片は確認されなかつたが、第IV章の報告のとおり埋甕内外の土壌のリン分析によれば、わずかながら埋甕内にリン酸成分の富化が認められており、遺体成分の残留の可能性が指摘されている。これまでの報告例からすれば、これも再葬墓との見解が許されよう。そして、本例も下大内遺跡例とともに一つの土坑または掘り込み内にひとつの甕棺が埋設される单棺再葬墓である。土器とともにその風習も東海地域からもたらされたものであろう。なお、本県においては弥生時代の甕棺はこの2例以外には後期に属する敷島町金の尾遺跡での別個体の甕下半部を蓋に用いた例が確認されているのみであるが、金の尾例も埋設状況は正位である。

第2点は時期の問題である。本遺跡例は接合しないものの口縁部破片が1点出土している。その口縁部破片には口唇部外面直下に指頭で粘土をつまみ挙げることによって表出される大きな単位の刻みと条痕が見られる。この刻み部分は、一見器面をそのままつまみ挙げたかのようであるが、仔細に観察するとごく低い粘土帯の張

り付けが確認できる。したがって“突帯上の刻み”の範疇に入るものと見做されよう。下大内遺跡例はこのような刻みのある突帯が二条つくもので、胸部側の二段目の突帯が厚みを有することによって高さのあるものとなっている。このような事例は蘿崎市宮ノ前遺跡でも確認されており、この時期に普遍的な施文である。本県の弥生土器編年作業を積極的に進めている中山誠二による分類の弥生0-(3)期～1-(1)期に位置付けられ、時期的には前期末となろう。本例は口縁部破片が小さいため、突帯は一条だけの確認であるが、それが二条であった可能性も否定できない。突帯が極めて低いものの、存在することから、やはり前期末に位置付けておきたい。

第3点は確認された場所が本遺跡例、下大内遺跡例とともに盆地底部ではなく、台地上である点である。下大内遺跡は標高525m、本遺跡は588mを計る。下大内遺跡の南約4kmには本県最古の水田跡が確認された蘿崎市宮ノ前遺跡（標高388m）が存在するが、ここでは浮線文系統と条痕文系の土器がまとまって出土しており、前期中葉～後葉の時期が与えられている。宮ノ前遺跡は藤井平と呼ばれる広大で平坦な河岸段丘の中央部に位置するが一見平坦な地形でも微細な起伏が認められ、前期の水田形成可能地は扇状地・旧河道・中洲などの低い縁辺部に限られていたと分析されている。これらの部分は水利がよい反面洪水の影響を受けやすい弱点も合わせ持つ。これら的小規模水田の生産力がどの程度のものであるかここでは論じ得ないが、生業の大きな柱の一つであったと考えられるものの、生活拠点としては洪水の危険のより少ない高台が選地されたのであろう。甲府盆地底部の標高は240m前後であるが、この地域には該期の集落や水田が未だ確認されていない。しかし、後期には敷島町金の尾遺跡を始め、比較的規模の大きな集落が点在し、水田も何ヵ所かで確認されており、少なくともその段階での盆地底部の開発が広く行われていたことは確かである。このような前・中期と後期の遺跡立地や開発の違いにはいくつかの理由が考えられようが、そのひとつとして、河川が集中する盆地底部の水管理技術を考えておきたい。弥生時代前・中期には盆地底部に比べ洪水の心配の少ない台地や段丘上の、相対的微低地に小規模な水田が作られていることが考えられるが、本遺跡周辺においても、盆地縁辺部の微高地上と同様の立地条件地で初期水田が今後確認されるものと期待される。

参考文献

- 『土地分類基本調査』（御岳昇仙峠）1985 山梨県企画管理局土地水対策課
- 『牧丘町誌』1985 牧丘町
- 『下大内遺跡・屋敷添第2遺跡・中原遺跡』1997 明野村教育委員会
- 『宮ノ前遺跡』1992 蘿崎市遺跡調査会



調査前遺跡遠景



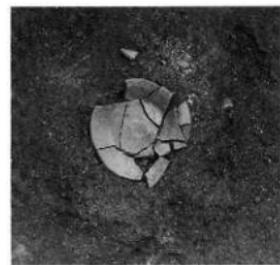
調査区全景



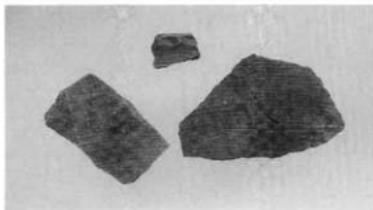
土抗群



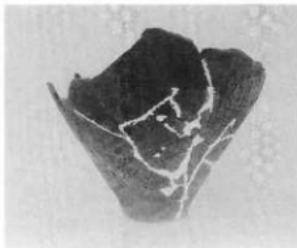
単独埋甕



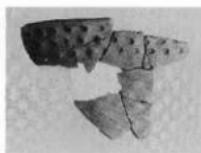
カワラケ出土状況



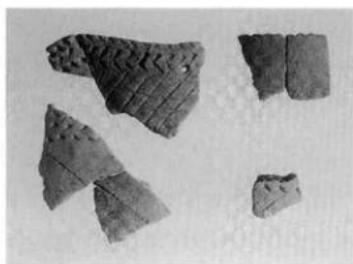
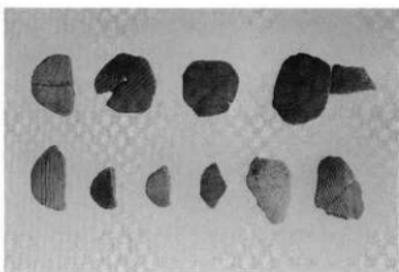
単独埋甕破片



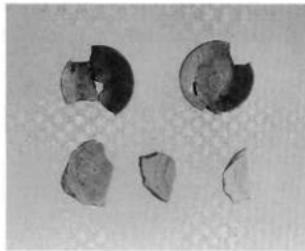
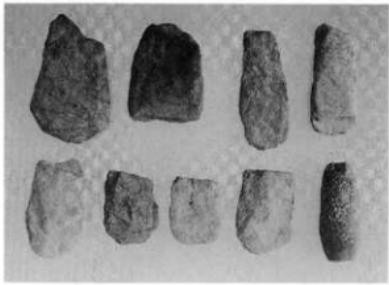
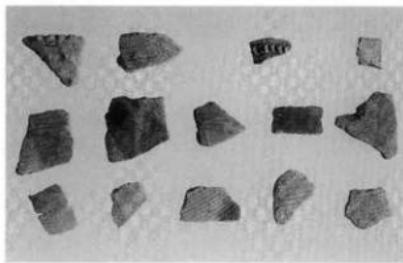
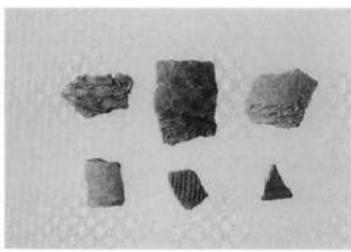
単独埋甕



7號土坑
出土土器



遺構外出土土器・石器



報告書概要

フリガナ	スマエイセキ
書名	諏訪前遺跡
副題	国道140号線（穿平バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第146集
著者名	長沢宏昌・宮里 学
発行所	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL0552-66-3016
印刷所	(株)少国民社
印刷・発行日	平成10年3月26日・平成10年3月30日
所在地	山梨県東山梨郡牧丘町室伏字西畠
地図名・位置	標高 塩山 25,000分の1 北緯35° 44' 45" 東経138° 43' 03" 標高588m
概要	主な時代 弥生時代 主な遺構 土坑・埋甕 土器・石器 特殊遺構 調査期間 平成8年5月13日～平成8年7月8日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第146集

1998年3月26日 印刷

1998年3月30日 発行

諏訪前遺跡報告書

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3016

発行 山梨県教育委員会

印刷 (株)少国民社

